

西洋古典におけるスポーツ哲学

関根 正美

本稿ではプラトン、キケロ、ホメロスを取り上げ、彼らの身体ならびに運動競技への言説がスポーツ哲学に与えている影響について述べる。これら古典におけるスポーツへの言及は、H. レンクによって取り上げられているものを対象にする。本稿で考察されたプラトンにおける生とは何かという問い、キケロにおける「老い」とオリンピックへの疑問、ホメロスの競争思想は、いずれも現代のスポーツ哲学の源流であるといえるだろう。

Keywords : プラトン, キケロ, ホメロス, ハンス・レンク

1. はじめに

私は『スポーツの哲学的研究』(不昧堂出版, 1999年)で、スポーツ哲学の対象について「古来から、哲学者達は競技や身体について関心を持ち、断片的に考察を試みてきた。けれども、われわれはそこまで遡る必要はないであろう」(p.15)と述べた。この認識は岸野(1977, p.90)による記述がベースになっている。スポーツ哲学は現代の学問であるとの認識は、今も間違っていないと考える。しかしこの認識は、古典における競技や身体を考察を軽視すべきでないとの考えに修正されなければならない。なぜなら人間が競技や身体運動を行うことは近代になって人類史上はじめて出現したことではないからである。近代スポーツと古代の競技は同じスポーツであるとして同一視はできないにしても、またその連続性については疑わしいとしても、人間が古代から競技場を走り格闘技で競った事実は残されている。

レンク自身、スポーツを語るうえで古代の哲学者たちをしばしば引き合いに出している。現代のスポーツにも古代の哲学者たちの影が射している。その影は狭い面積でしかないとしても、レンクの思考フィルターによって確実に色濃くとらえられている。哲学者とスポーツは無縁ではなく、そして哲学とスポーツは相関関係の中にある。

2. プラトンと生の概念

実際に、古代の哲学者や思想家たちは競技や身体

運動と関わりをもっている。最も典型的な例はプラトンである。彼の名前の「プラトン」が「幅広い」を意味するギリシア語「プラトゥス」に由来するニックネームであることはよく知られているし、実際に著作の中でも身体的運動に言及している。

レンクは1982年の論文の中で、『ティマイオス』における「だから、身体から不浄を取り除き、身体を引き締めるいろいろな方法のうちでは、体操によるものが一番すぐれていることになる」(89a)との箇所や、『テアイテトス』の「身体の状態は休ませて使わないでおくにだめになるけれども、体操や運動によって、たいていの場合、保全されるのではないか」(153b)との記述を引用し、「明らかに彼は、体操や身体運動や組織的トレーニングについて、相当のことを知っていたと思われる」と述べている。一般に、プラトンが哲学史の中で最も重要な哲学者であることに異論はないだろう。九鬼が指摘するように、ルネッサンス期においてプラトンの著作が聖書とともに「至宝」とされたことはよく知られている。プラトンという西洋的知の原点はスポーツを哲学することに対しても限定的にはあるが関係を持っている。

日本では体育哲学という研究領域において、西洋古典における体育や身体運動に関する研究が蓄積されている。ここではプラトンを中心にそれらを概観しておこう。

まず、三原はプラトンの『国家』におけるギュム

ナスティケー（体育）を扱った論文の中で、プラトンが徳（教育）論の中でギムナスティケーに与えた役割について考察している。三原は次のように言っている。「プラトンは、理知的部分との調和を達成するために、気概的部分の機能である『保持』を進展させるに資する教育としてギムナスティケーを導入した、と考えられるのである」（三原，1995）。ここでギムナスティケーは、その「身体の鍛錬」によって、単に身体を強化することにとどまらず「魂の気概的部分」への効果も期待されていたことが明らかにされている。現代の教育制度として行われている体育は身体教育である。ただし、何らかの精神的要素に対する教育効果も要請されている。身体教育としての現代体育は「心体教育」なのである。この考えの源流は、三原の論に基づけばプラトンにおけるギムナスティケー（体育）にあると思われる。

次に木庭はプラトンに関する論考の中で、身体運動や競技の意味について記述している。彼はプラトンの運動競技論をテクネー、ソーマ、パトスといった三つの視点から考察した上で、次のように結論づけている。「そして、運動競技には、それに固有の感情や性格として、日常の道德規範には収まりきらないような、勝利への愛求や気概、さらには、狡猾さや自由などが見られるのである」（木庭，2007）。日常の道德規範には収まりきらない精神性を有する行為は、時として規範を逸脱することになる。「プラトンにとって、運動競技は、詩や芸術などの伝統的な文化と同じく、反道德的な性格を持つが故に、国家や教育において危険視されるべきものだったのである」（木庭，2007）。一般的な常識にしたがえば、危険なものは禁止されなければならない。しかし危険は魅力と背中合わせである。人間は危険なものの中に魅力を感じもする。木庭は次のように指摘する。「ただし、逆に言えば、このことは、古代ギリシアの運動競技が、そうした伝統的な文化とならんで、テクネー、ソーマ、パトスのそれぞれにおける高度な専門性を必要とし、また、その高度な専門性によって、多くの人々を惹きつける魅力をそなえていたことを意味する」（木庭，2007）。少なからぬ芸術家が狂気をはらみながら作品を後世に残していることはよく知られている。ゴッホもシャガールもそうであった。スポーツの競技者にもそれはいえるのではないか。トップレベルの競技者に見られる妥協なき探求心や勝利への執念といったパトス、世界を驚かす技術や戦術の革新といったテクネーなどを目の当たりにすると、われわれはそこに狂気を感じ取ることができるだろう。

レンクはプラトンをこのような身体運動や競技と

はまた別の文脈で登場させる。それは彼が自分の人間観を表明する文脈である。レンクが引用するプラトンの最も重要な言葉は「運動が止む時、生もまた終わる」（パイドロス，245C）である。これを1981年の会長講演で次のように語っている。「人間的であること、人間として生きるということは、能動的であること、創造的であることなのだ。すなわちそれは、ホモ・アクトールであり、ホモ・ペルフォルマートルであり、ホモ・クレアートルであることなのだ。プラトンもまた、生を、能動的な運動——すなわち魂の運動——と規定した。つまり、『運動がやむとき、生命も終わる』のである」（Lenk, 1982）。また、1983年の*Eigenleistung*では、次のように述べている。「『運動が止む時、生もまた終わる』（パイドロス，245C）とプラトンは簡潔に述べている。プラトンはそのことを知っていたに違いない。——中略——生とは運動であり、自己の運動のみが生命を与えられた生なのである」（Lenk, 1983, S. 49-50）。

レンクがプラトンの言説で重要視するのは、身体や競技に言及している箇所ではない。1981年の講演や1983年の著書で取り上げているように、生と運動に言及した部分である。レンクが重視するのは、『パイドロス』における次の言葉である。「魂はすべて不死なるものである。なぜならば、つねに動いてやまぬものは、不死なるものであるから。しかるに、他のものを動かしながらも、また他のものによって動かされるところのものは、動くのをやめることがあり、ひいてはそのとき、生きることをやめる」（パイドロス，245C，藤沢令夫訳，1974, p.177）。レンクのスポーツ哲学ではプラトンが実際に身体や競技について何を言っているかが重要なのではなく、「生とは何か」について述べている点に注目すべきである。彼のスポーツ哲学は、人間とは何かという人間観に支えられて展開する。そして、このプラトンの生に関する言葉が彼の人間観を支えているのである。

3. キケロ

キケロ（前106-43）とスポーツ哲学の取り合わせはいかにも奇妙であると思われるだろう。キケロは紀元前1世紀に活躍したローマの文化人であり政治家である。西洋文化の源流といわれるほど、彼の知的遺産は時代を通じて精神世界に強い影響を及ぼしてきた。それは、「ペトラルカからマキアヴェッリ、エラスムスからモンテーニュ、ロックからヴォルテール、ジェファーソンからモムゼン、近代をかたどる知的巨人たちはキケロに学び、あるいは啓発され、あるいは反発した。間接的に、いわばキケロ的水脈

の恩恵に浴した人々、あるいはキケロ的伝統にふれた経験をもつ者は数え切れない」(高田, 1999, p.3.)と言われるほどである。キケロが偉大であるとの評価はあくまで文化人としてのそれであって、そこにスポーツ思想は含まれていない。ここでもまた、キケロとスポーツの関連はレンクの記述を通して浮かび上がってくる。

実際にレンクの著作の中で取り上げられるキケロの題材は決して多くはない。わずかに「老年について」と「トゥスクルム荘対談集」が触れられているのみである。それにもかかわらず、スポーツ哲学の萌芽としてキケロが俎上に上げられるには訳がある。引用されている量ではなく、引用される際にそれによって言及されるテーマの大きさが問題なのである。つまり、レンクが何を言おうとしている文脈で引用しているかが重要である。

まず「老年について」であるが、これは主に1985年刊の*Die achte Kunst*で引用されている。まずレンクは次のように言っている。「古代の偉大なレスラーで、オリンピアとデルフィの競技会で六度優勝し、イストミアで十度、メシアで九度優勝したクロトンの人ミロンは、彼がすでに老人となって競技者たちが運動場で練習しているのを見たとき、自分の筋骨を眺めつつ涙を流しながら『ああ、私の腕は死んでしまっている』と嘆いたと伝えられている」(Lenk, 1985, S.131.)。

そしてキケロは次のようにミロンを叱責する。「愚か者め、腕というより君自身が死んでいるのだ。なぜなら、君が名声を得たのは君という人間によってではなく、肺と腕の野獸的な強さによってなのだから」(Cicero, 1996, pp.36-37)。続けてレンクは次のように言う。

「ミロンの言葉は、若い力の喪失に対するギリシア人の悲しみを典型的に語っているのだろうか。老年時代はギリシア人に嫌われていた。今日のわれわれについてはどうであろうか。若さへの崇拜は、われわれの社会においても確実に——特にスポーツでは——強調されすぎてはいないだろうか」(Lenk, 1985, S.131-132.)。レンクがキケロを引用しつつ提起する問題は、競技者が加齢に伴う身体の衰えをどのように受け止めるかとの問題である。身体能力の衰えは、科学的な数値によって示されるように人間が生涯を生きるうえで避けて通れない事実である。そのこともあってか、これまでのスポーツ科学における研究の中で、身体が問題になるのは主に自然科学的なアプローチでの加齢に伴う身体的健康の問題であり、高齢者の生理および心理面における健康を数値によって検証する研究であった。思想として表

現される「身体論」にしても、身体の衰えという問題はあまりテーマとして取り上げられていないように思われる。1995年の多木浩二『スポーツを考える——身体・資本・ナショナリズム』ではスポーツと身体の原理的な考察が試みられている。しかし対象は現在のスポーツ状況における身体の分析である。「現在のスポーツのゲームに現れている身体は、すでに、テクノロジーを組み込んだ一種の幻覚の領域に入り込んでいるのではないか」(多木, 1995, p.149)。多木の優れた論考に不備があるのではない。もともと身体の衰えを思想として語る態度が珍しいのである。生涯スポーツがブームになり、「子供からお年寄りまでスポーツに親しむためのスポーツ」を研究する生涯スポーツ論にしても、身体の原理的な考察はみられず、近年はスポーツクラブのマネジメント方法論へと関心が傾斜している。生涯スポーツ論においても「身体の衰え」は何ら問題にすることのない現象に思える。

身体が衰えるということは人間にとって自然な現象である。けれどもここで問題になるのは、体力の衰えが生物学的存在である人間にとって自然である一方で、生活様式の転換とそれに伴う内面の変化は自然の産物ではない点である。体力の衰えという生物学的現象は——もちろん個人差は認められるにしても——われわれ人間存在に誰にでも等しく現れる。それに対し、内面の変化は生物学的現象ではなく人間の精神に根ざしている。この両者の根本的な相違が老年における体力の衰えに存在し、一人の人間の中に加齢に伴う身体の衰えという問題を引き起こすものと思われる。ミロンの嘆きがそのことを物語っている。

レンクはキケロを引用しつつ、身体の衰えという問題を人間学の次元で考えているといえるだろう。スポーツ哲学における「老い」の問題はキケロを元祖としつつ展開される可能性がある。*Die achte Kunst*におけるレンクの記述は「老いの人間学」としても読むことが可能である。

次に「トゥスクルム荘対談集」であるが、レンクのオリンピックに関する記述において次の箇所が引用されている。1981年の“The task of the philosophy of sport: toward a philosophic anthropology of the achieving being”における前半部分にこれが引用され(この部分は邦訳ではカットされており、日本語には訳されていない)、次に2006年に日本・体育スポーツ哲学会によって東京で開催された「スポーツ哲学研究セミナー2006」における講演で言及されている。ちなみにこの時のレンクの来日は世界哲学アカデミー(IIP:Institut International de

Philosophie) の会合が東京でもともとあったもので、その滞在期間に合わせて「スポーツ哲学セミナー」が開催された。

さて、引用されているのは次の部分である。「そこで、ピュタゴラスは、人生と祝典は同じようなものに思われると答えて言った。祝典はギリシア本土から大勢の人が集まり、壮大な競技会が開かれ、祝われるところである。ある者は鍛えた身体で冠の栄光と卓越を求め、またある者は売買の利益に引き寄せられているのだが、他方、ある種の人々がいて、この人々は自由民でも最高の者であり、拍手を求めたり利益を求めたりせず、観察のためにやって来ていて、何がどのようになされているかを熱心に吟味している。そのように、われわれも、別の町からとある賑やかな祝典にやって来たかのように、別の生と別の存在状態から出発して、こちらの人生に入り、ある者は栄光の奴隷となり、ある者は金銭の奴隷となっているのである。だが、稀ではあるが、他のすべてのものを取るに足らぬものと考え、事物の本性を熱心に観察する者もいる。こういう者は、自らを知恵の愛好者、すなわち「哲学者」と呼んでいる。競技会で見物する際に自分のために何も得ようとしないのが最も自由な精神であるのと同じように、人生においては、事物の本性を観察し、認識することが他のいかなる追求よりもまさっているのである」(キケロー選集 12, pp.284-285. *Tusculan Disputations*, III. 9.)。

この言葉はピュタゴラスがコリントスにあるプリーウースに出かけた際に、その地を支配していたレオンを相手に語ったものである。「『哲学者』とはどういうもので、哲学者と哲学者以外ではどこが違うのか」(キケロー選集 12, p.284. *Tusculan Disputations*, III. 8-9.) との問いに対するピュタゴラスからの答えである。今日のオリンピックになぞらえれば、競技者は「鍛えた身体で冠の栄光と卓越を求め」、メディアやスポンサーは「売買の利益に引き寄せられている」と解釈できるかもしれない。では、「哲学者」とよばれる「拍手を求めたり利益を求めたりせず、観察のためにやって来ていて、何がどのようになされているかを熱心に吟味している」人は誰なのだろうか。

レンクは現代のオリンピック哲学に照らして、このような考えを批判する。そもそもオリンピックと人生を同列に考えることが誤りであるという。「すなわち、非常に珍しい業績に対する傑出した功績と献身に対して、トップレベルのスポーツ、特にオリンピック競技は、正常な人生を簡潔に反映するだけではないのです。それは顕著な業績と献身のシンボ

ルを反映します。ピタゴラスはオリンピックの競争が観衆と活発な競技者に対して持っている『神話』の解釈を忘れていたのです」(レンク, 2006, 畑, 関根訳)。オリンピックにおける競技者は神話的に解釈されるべきであって、その達成はピタゴラスの解釈のように日常的な人生の範疇で解釈されるべきでないレンクは考える。スポーツを人生になぞらえることは可能であろう。スポーツにおける挫折と再生の物語を人生の浮き沈みになぞらえて考えることは可能であろうし、またそのことにスポーツの魅力を感じる人も多いだろう。スポーツ小説の多くはこの図式を採用し、スポーツを人生の比喩として訴えようとする。しかし、少なくともオリンピック競技に象徴されるスポーツの行為は「平凡な」人生と同一視できない。人間としてスポーツを行うかぎり、スポーツを生きることも人生の一部である。スポーツの経験を通して獲得される充実感や高揚感など、至高体験さえも人生の一部として組み込まれる。トップレベルのスポーツを通常の人生という視点から見るとどう解釈されるだろうか。オリンピックのメダリストなどのトップアスリートは凡人を基準にしてみたら奇人、変人であろう。彼らの生活は普通の生活人には真似のできないものであり、彼らの語る言葉は普通の生活人には時として理解不能である。しかしこれらの現象は一流競技者が変人であることからもたらされるのではない。そもそも普通の生活人を基準にして一流競技者を理解しようとする態度そのものが間違っているのである。レンクは日常の常識では把握しきれない競技者を「神話」から解釈しようとするのである。

以上のように、キケローが残した身体や競技者に関する言説は大きく二つの点でレンクを刺激する。加齢による身体の衰えと競技者とは誰かとの問題は、生涯スポーツとオリンピックの価値が高まった現代においても問われるべき問題である。

4. ホメロス

レンクは西洋の人間学の源流を古代ギリシアに求める。それらはもちろん神話的な起源も含んでいるけれども、今日も認められる人間像の典型例であるとレンクは考えている。

その一つとして、レンクはホメロスの——オリンピック的人間像 (*das Bild des homerisch-olympischen Menschen*) を提示する。レンクがホメロスを引用しているのは、『イーリアス』における言葉である。ホメロスの『イーリアス』は「叙事詩にありがちな、事件をその発生の順序に従って語ることをせずに、長い十年間のトロイエー包囲攻撃の中の、わ

ずか数十日間に起った出来事を選んで、それに物語を集中して」(高津, 1966, p.7) 作られたものである。

具体的にレンクが引用しているのは次の二カ所である。

「父はわたしをトロイエへ送り出す折に、常に衆に抜きんでて最高の手柄をたてよ、またわが祖先はエピュレならびに広大なリキュエにおいて並びなき勇士と称えられた方々であるから、その家名を辱めてはならぬと、きびしく申し渡した」(Ilias VI:205, 松平訳, p.192)。

「ペレウスはわが子アキレウスに、常に他の者に優る手柄を樹てよといい、アクトルが一子メノイテイオスは、そなたにこう諭された」(Ilias XI:294, 松平訳, p.192)。この二カ所で述べられているそれぞれの言葉すなわち、「常に衆に抜きんでて最高の手柄をたてよ」、「常に他の者に優る手柄を樹てよ」にレンクは注目する。彼はスポーツ哲学を語る場面で再三にわたってこれらを引用している。

まず1979年の*Leistungssport: Ideologie oder Mythos?*では、「達成をめぐる競争と達成スポーツの文化的特性」を論じた箇所ではホメロスによる件の言葉が「ギリシア文化において特別な意味を持つ文化的価値規範」(S.145)であると述べられている。ギリシア文化において競争が重要な意味を持っていた点についてはニーチェの考察を取り上げねばならないが、これは別の機会に論じることにする。

1983年の*Eigenleistung*では、西洋文化の一つである近代スポーツが有する競争的性格の源流として、ホメロスが次のように引用されている。「西洋の達成文化がもつ競争への傾向を特徴づけるスローガンとして、ホメロスのイーリアスにおける言葉を挙げる事ができる。『絶えず最高の者であれ、絶えず他者を抜きんでよ』。アキレウスはこの言葉を父から、人生訓として授かった。」(Lenk, 1983, S.57) と述べている。

1985年の*Die achte Kunst*では、第二章にあたる「競争——それは『万物の父』なのか」でイーリアスにおける同様の言葉「常に他の者に優る手柄を樹てよ」が引用されている (Lenk, 1985, S.41)。ここでレンクは競争を重要視する態度が『オデュッセイア』にも見られることを指摘したうえで、「身体的な競争に勝利して卓越を示すことはやはり重要だったのだ」(Lenk, 1985, S.41) と述べている。ホメロスの言葉は1985年の著作において、ある問いをレンクにもたらす。すなわち、「スポーツの競争はどのような競い合いを褒め称えるもの——競い合いを重視する文化のメッカ——である。したがって、ギ

リシア人たちの歴史的な凡例を抜きにして現代の競争スポーツを考えることはできないのではないだろうか」(Lenk, 1985, S.42)。スポーツ哲学の対象は西洋で生まれた近代スポーツを中心とする。生涯スポーツの時代にあって、それがすべてではないとしても近代の競技スポーツを抜きにしては語れない。

また2006年の東京講演では、「ギリシャの哲学者は、もちろんギリシャ神話も含まれますが、いくつかの人間像を作り上げるという点で、西洋の人間学の発展に決定的な影響を及ぼしました」と述べて、上記の『イーリアス』における二つの言葉を引用し、それらは「当時の人間像のスローガンだったのでしょう」と推論している。

以上、レンクは再三にわたってホメロス文学で述べられている上述の言葉を引用しつつ、スポーツの競争が西洋文化の源流に遡ることを指摘する。現代の文化現象として営まれているスポーツを観察するならば、競争は唯一の特徴とはいえない。現代スポーツの形態としては明確に競争の形を取らないスポーツがあるし、教育として行われるスポーツは必ずしも競争に至高価値を付与すべきでないともいえる。さらに健康の維持増進を目的として行われるフィットネスとしてのスポーツも現代では無視できない。現代では学生などの若年層から高齢者に至るまでスポーツジムに通うようになっており、フィットネスとしてのスポーツは健康産業として確立されている。その反面、競争は必ずしもオリンピックに代表されるトップレベルのスポーツだけに特徴的であるともいえない。いかなるレベルであっても競争によって高い理想を目指す道が人間には開かれている。それは学校の部活動や体育の授業で行われるスポーツについても同様である。スポーツに限らず音楽や演劇、学問、パフォーミングアートの分野などでもそれは当てはまる。子供の舞台や演奏会でも「コンテスト」や「コンクール」が行われるし、たとえ客観的な順位付けが行われなくても何らかの賞を目指した演技や演奏が考えられる。最初から競争をめざしているわけではなくとも、何らかの形で競争の精神が採用されているといえよう。このように考えると、ホメロスに歌われ西洋文化を基礎づけるものとしての「競争」の概念は、単純に結果を争う意味ではとらえられなくなるのではないか。高い理想の実現を目指すための競争は利得の獲得を目指して行われるのではない。ホメロスが歌いレンクが西洋文化の源流とみなした競争は、そのような功利主義的な行為ではない。むしろ精神的な次元を含む「努力」のことだと思われる。高津が「しかし、ホメロスの英雄は、このような彼の生死さえも

神々の手に全くゆだねながらも、その名誉だけは守り通し、そしてそのための努力を惜しまなかった」(高津, 1966, p.201)と述べるように、名誉を守るための努力を注ぐことが重要なのである。このような努力に導かれた競争にレンクは西洋文化の源流を嗅ぎ取る。

ただし言うまでもないことだが、レンクによって引用されるホメロスの言葉はスポーツを特徴づける唯一の価値基準ではない。それはスポーツを行う人間全般を考える時の人間像として機能するのである。

5. 終わりに

プラトンの生の概念からスポーツを考えると、われわれ人間が「よりよく生きるため」のスポーツとは何かと問わざるを得ない。このことが意味するのは、これまでスポーツの理念とされてきた健康や人間形成といった観点をも包括するスポーツ思想を構想しなければならないということである。単一理論や一因子に還元される一元論的スポーツ哲学ではなく、包括的なスポーツ哲学構想の要求をプラトン思想はわれわれに突きつけている。

生涯スポーツ論は一般に生涯にわたる身体運動の喜びを語る。ここで「身体の衰え」の問題が看過されているとはいえないだろうか。加齢に伴う身体の衰えは医学的な対処で解決できるものだろうか。このような疑問に対し、キケロの思想は加齢に伴う身体の衰えは存在そのものの問題であることを示唆している。医学的データの提示では解決しきれない問題が、キケロの身体論には隠されていたのだ。さらにキケロの思想はレンクの競技者論に影響を与えている。トップレベルの競技がビジネスの対象になり、スポーツの産業化が急速に進んでいる。競技者が商品化される傾向は未だ進展しているといえる。レンクは商品としての競技者像とは全く異なる神話としての競技者像を立てるが、この発想の源流を本稿ではキケロにみることができた。

ホメロスからのレンクによる引用は、本稿で挙げた言葉に尽きる。それは極めて限定された言葉である。しかしレンクはその限定された言葉を様々な著述の中で引用しており、競争思想の元祖としての評価をホメロスに与える。西洋における競争文化の文献上の根拠がここで確認された。文化的次元でとらえられる競争の概念は自己達成や自己成就の意味をもち、経済学的な意味ないし経済的付加価値の次元でとらえるべきではない。この競争概念の精神性が西洋古典とスポーツ哲学との接点を作り出している。

以上、本稿ではH. レンクが実際に彼のスポーツ哲

学に関する著作や論文で言及している箇所を対象として、西洋古典におけるスポーツ哲学の萌芽を探ってきた。本稿で考察されたプラトンにおける生とは何かという問い、キケロにおける「老い」とオリンピックへの疑問、ホメロスの競争思想は、いずれも現代のスポーツ哲学の源流であるといえるだろう。

文献

キケロ, 中務哲郎訳『大カトー・老年について』岩波書店, 1999.

〈Cicero (1996) Cato Maior De Senectute (12s.). Loeb Classical Library. Translated by W. A. Falconer. Harvard University Press: London.〉

キケロ, 木村健治・岩谷智訳「トゥスкулム荘対談集」岩波書店, キケロー選集12, 『哲学』, 2002.

〈Cicer (1996) Tusculan Disputations. Loeb Classical Library. Translated by J. E. King. Harvard University Press: London.〉

ホメロス, 松平千秋訳『イリアス』岩波文庫, 1992.
木庭康樹「プラトンの運動競技論序説——スポーツ概念のギリシア的把握に向けて——」スポーツ史研究20, pp. 95-108. 2007.

岸野雄三「スポーツ科学とは何か」,
朝比奈一男・水野忠文・岸野雄三編著『スポーツの科学的原理』大修館書店, 1977.

Lenk, H. *Leistungssport: Ideologie oder Mythos?* Karl Hoffman. 1972.

Lenk, H. "Task of the Philosophy of Sport: Between Publicity and Anthropology. Toward a Philosophic Anthropology of the Achieving Being". Presidential Address-1981. *Journal of the Philosophy of Sport*. pp. 94-106. 1982.

Lenk, H. *Eigenleistung*. Interfrom, 1983.

Lenk, H. *Die achte Kunst*. Interfrom, 1985.

ハンス・レンク, 畑孝幸・関根正美訳「オリンピック競技者の人間学——オリンピック大会と競技者のための現代哲学に向けて——」体育・スポーツ哲学研究28-2, pp. 119-134. 2006.

三原幹生「プラトンの『国家』第二—四巻におけるギュムナスティケー論——「勇気」の解釈をめぐって——」体育原理研究26, pp. 11-22. 1995.

プラトン, 藤沢令夫訳『パイドロス』岩波書店, プラトン全集5, 1974.

プラトン, 種山恭子訳『ティマイオス』岩波書店, プラトン全集12, 1975.

プラトン, 田中美知太郎訳『テアイテトス』岩波書店, プラトン全集2, 1974.

関根正美『スポーツの哲学的研究: ハンス・レンク

- の達成思想』不昧堂出版，1999.
- 高田康成『キケロ』岩波新書，1999.
- 高津春繁『ホメーロスの英雄叙事詩』岩波新書，
- 1966.
- 多木浩二『スポーツを考える—身体・資本・ナショナリズム』ちくま新書，1995.